
『Dual Swords ～双剣～』

† 洸 †

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『Dual Swords ｝双剣｝』

【Nコード】

N1104D

【作者名】

十洸十

【あらすじ】

国をかけ。人々が戦った時代。人は何を思い、国を守ったのだろう…人は何を思い、国を滅ぼしたのだろう…人は何を思い、国を創ったのだろう…夢を追い。新しい信念を…新しい理想を…新しい国を作る物語

第1話

『Twin Swords』

第一話

昔、すべては一つの国だった
いつからか、国は4つに別れ毎日のように争いがおこなわれていた
そして、また新たな国が誕生しようとしている・・・

未だ平穏が訪れることのない、永遠とも言える戦いの繰り返し。

あたりは大砲の音や馬の蹄の音が鳴り響き、何万という人間の血で
血を洗うぶつかり合い

が繰り返されている。

街の門を突破したゼノビア軍は、あと一歩のところで街を制圧できるのだが

守備についているローデイスの騎士の強さは、それ以上の進撃を許さなかった。

ゼノビアの兵長がシビレをきらして叫ぶ。

「誰かヤツを倒そうというものは、おらんのか！？褒美は意のまま
だぞー！」

しかし、一向に誰も出ようとしなない。

周りに転がっている死体が足を止めてしまつのだ。

兵長がさらに声を張り上げ、罵声を浴びせようした時だった。

一人の傭兵がローデイスの騎士へ歩を進めていく。

スラリとした体がわかるくらいの軽装備だが、ゴツツイ兜をかぶっている

ため、その素顔を見ることはできない。

腰に一本の鞘があるが、両手には二本の刀があり

未だ乾ききっていない血が刃をしたたり地面に落ちている。

「参る!!!」

ローデイスの騎士は力強く踏み込むと戦槌を振り下ろす。

振り下ろした戦槌は地面を砕き、あたりに土が飛び散る。

しかし飛び散ったのは土だけではなく、ローデイスの騎士の頭も飛んでいった。

頭のなくなった体は、噴水のように血を吹き出し膝が地につき

正座した格好のまま動かなくなってしまった。

先ほどの怒りを忘れ、呆然としていた兵長は　ハッ！と我に返り声を張り上げる。

「と、突入!!!」

敵の士気は総崩れで、あっという間にゼノビア軍は制圧してしまった。

門の前では、先程の傭兵が一人で立っている。

武器を納めたその手で、無造作に脱ぎ捨てた兜の下からは、黒い瞳の女の顔があらわれた。

兵長は近づき、

「お前、名はなんという?」

女は静かに口を開いた。

「……モト。」

そのあと、ゼノビアの騎士になるよう誘われたがモトは無言で首を縦に振ることはない。

「お前は何を望むのだ?」

モトは報酬を受け取ると、初めて眼を合かし一言

「……国。」とだけ、しゃべるとその場を立ち去った。

中立国・サープ

この酒場には様々な情報が集まり、発信源でもあり
やっかいな仕事などの依頼もここに集まるものである。

当然、そんな場所なのだから

「安全」と言う単語とは、無縁である。

モトは隅のほうで酒を飲んでいた。

酒場に一人でいること自体、やっかいなことに巻き込まれそうなのに「女」であるのだから

ら案の定、何人かのゴロツキに喧嘩を売られてしまう。

数秒で軽々と酒場からたたき出すモト、周りの客は

「賭け」をしていた者が多く

儲かったものたちはモトに拍手を送る。

モトが席に戻るころには、一人の男が近づいてきた。

「あなたの腕を見込んで仕事を依頼したい。」

もちろん、モトはこれを狙って酒場に来ている。

周りはいつもモトの強さを知っているのだから手をだすことは絶対でない。

それを知らない不幸なゴロツキはモトが仕事を得るためのダシに使われるのだ。

依頼された仕事の内容はというと、最近ひんばんに積荷を狙う盗賊団を……

つまり、用心棒としてモトは雇われたのだ。

依頼者は、場所と日時を告げると酒場を出ていった。

するとすぐ近くで酒を飲んでいた男が話しかけてくる。

「今回の仕事はやめといたほうがいいぞ。」

「どうして？」

男は少し声を潜めモトに話す。

「その盗賊団の頭、鉄棍鬼っていわれる、相当、腕の立つヤツらしいぞ。」

「鉄棍鬼……そんなヤツがいたのか。」

モトは少し笑うと酒場を出ていった。

翌日、馬車の周りを数人の傭兵たちが囲み歩いている。

もちろんその中にはモトが含まれている。

日が上がるとともにサープを発し、マーラルを目指していく。
平地が続く一本道

見渡しがよく、いつ盗賊が来てもすぐに戦闘態勢にはいることができる。

むちゃ有利な待ち伏せもこれでは意味がない。

（今日は現れないか・・・）

とモトが思った時、雲行きがあやしくなってきた。

突然の雨、勢いよく降ってきたので道はずれの森の中で雨宿りすることになった。

しかし、すぐに雨は止んでしまい再出発したが今度は

濃霧のため前方が見えなくなってしまった。

むやみに動くのは危険なため、その場で待機となり各自交代で馬車の見張りについた。

「あんだ、よくこんな仕事やるねえ。」

休んでいたモトと向かいあって座っていた男が話しかけてきた。

「あんたくらいの美人ならもっと楽な方法があるのに。」

モトは手を口にあてて笑う。

「鉄棍鬼がどんなヤツかと思ってね。」

「あんだ物好きだなあ。」

直後、モトは胸騒ぎを感じ外へ出る。

馬車を出ると少しずつ霧が晴れてきたのか、前方が見え始めた。

しかも、蹄の音も・・・どうやら盗賊達と偶然に出会ってしまったようだ。

誰かが叫ぶと盗賊はこちらへ突撃してきた。

傭兵達は武器を構えて盗賊達を向かえ撃つ。

モトも柳葉刀を抜刀すると相手の脇・首に刃をあて、削ぎ飛ばしていく。

すると、馬車の反対側を守っていた傭兵二人がモトの頭上から吹っ飛んできた。

体を守るはずの鎧は体にめり込み、即死としか思わせない程の破壊力。

モトは急いで反対側に駆けつけるとそこには

印象的な紅い髪と紅い髭の人物が身の程並みの鉄棍をもって仁王立ちしていた。

「貴様も雇われた傭兵の一人か・・・女だからといって手加減はせん。」

「お前が噂の鉄棍鬼か？」

「おうとも！我こそは鉄棍鬼・グラム。 いざ！！」

モトは刀の峰を叩いて合図を送るとグラムの鉄棍が無数の突きを繰り出す。

モトは一つ一つの突きに刀をあてて体を回転させると竜巻のような波状攻撃で

グラムをなんなく後退させてしまった。

グラムは地面をたたきつける程の大振りで迫るが、軽快なバックステップでモトは避け

タイミングを計ると下段の踵落として鉄棍を上から踏みつけた。

止めたと思ったモトだったが、体が一瞬にして空に舞い上がった。

驚きながらもモトの顔は嬉しそうだ。

「そうでなくては。」

それからの豪と柔の対決といったら盗賊・傭兵

関係なく魅入られ闘いを止めてしまうほどだった

「勝負はつかん・・・鉄棍鬼よ、この勝負預ける気はないか？」

「いいだろう！この勝負、今日だけで終わらすのは勿体無い。」

この荷はお前の腕にてあきらめるとしよう。」

そう言うグラム率いる盗賊達は撤退していった。

モトは残った馬に跨りグラムを追いかける。

「なんだ？勝負は預けるのではなかったのか？」

「預けるとも。そこで、私の仲間となってくれぬか？」

「なに！！？」

さすがに驚いたグラムは馬を止める。

「敵である我をだと？」

「ああ、貴殿の腕を見込んでお願いしたい。」
少し考えるとグラムは口を開いた。

「して、なんのためだ？」

「私は私の求めた国を創るためだ！！」

周りの盗賊達は大笑いしてモトを馬鹿にする。

グラムも大笑いしながら馬から落ちる始末。

「その国を創るには貴殿の力が必要だ。共に創ろう。」

馬上したままグラムに手を差し出すモト。

グラムはその手を掴むと笑顔のまま叫ぶ。

「いいだろう！我もお前が気に入った。それまで勝負は預けるとしよう！！」

二日後、サープのいつもの酒場にはいつもの顔と鉄棍鬼が酒を飲んでいる。

飲んでいるといっても、グラムだけなのだが・・・。

「それで？今後の予定はどうするのだ？」

グラムは酒に強いのか、紅いのは髪と髭だけで頬は一向に赤くならない。

「とりあえず、戦場にでるつもりだ。」

「あ？金が必要なら荷でも襲えばよからう？」

「ははは。だが、戦場には金を稼ぎに行くのではない。」

「？」

「戦場にいけば、おのずと強者がいるものさ。」

なるほど。っと思いつながらも、グラムの酒の量は減ることはなかった。

次の日モトとグラム率いる盗賊達はフェイの草原にゼノビア側の軍隊として参加していた。

「どいつもこいつも似たようなヤツばかりだな。」

グラムが鉄棍を地面に突き刺し、寄りかかりながら口を尖らせる。

「闘っていれば、そのうちいるかもね。」

兜をかぶりながらグラムに話しかけたモトがあたりを見回すと、周りにいたはずの兵士や

傭兵がいない。

どうやら合図を聞き逃してしまったらしい。

その場にポツンと取り残されたモト、グラムとその配下の盗賊達・

「お頭、どうしましょう？」

「もう、お前らの好きにしてくれ。」

投げやりなグラムの言葉を聞くと盗賊達は遅れながら戦場へ。

そのあとモトはゆっくりと、戦場へ歩を進めていく。

そのスローリーな動きは敵軍と遭遇した瞬間、恐ろしいスピードに変化した。

グラムの遙か後ろに居たはずのモトは、グラムを追い越しドンドン前に斬り進んでいく。

モトに負けじとグラムの鉄棍も唸りを上げハイランド兵を吹き飛ばしていった。

あらかたの敵兵を二人で一掃し、ひとまず周囲の戦火が収まりほっと一息ついたときだった。

まだ戦の続いている、遙か前方に目を向けたモトは、異様な光景を眼にした。

隊列を組んで敵を追い詰めているゼノビアの騎兵が、ポツポツと馬ごと消えてゆくのだ。

兵士が斬られて落馬するのならともかく、馬まで消えるのはおかしい。

「なにかおきたようだな。」

妙に凸凹のくつきりした地平線を眺めながら、グラムが呟いた。

「行ってみればわかる。」

モトとグラムがその方向へ走っていくと傭兵達がこちらへ逃げてきた。

ゼノビアの騎兵長と揉めているところだった。

「えい！ 貴様ら戻らんか！！」

「あんなのがいるなんてきてねえぞ！！」

「馬ごと人間きり飛ばすヤツなんか相手にできるか！！」

「どうした？」

モトが問いかけた時に、傭兵が群がっていたところからここまで上半身だけの死体が吹き飛んできた。

「あ、あいつだ・・・とにかく、俺達はもう逃げるぞ。」

騎兵長の言葉を無視して逃げていく傭兵達。

モトは問題の場所に視線を向ける。

たくさん人間がいるため、よくわからないが時々なにか大きな物体がでているのがよくわかる。

「どうやらヤツコさん、よつぼデカイ得物をあつかっているみたいだぜ。」

ニタニタと笑いながらグラムは鉄棍を握り締める。

やがて、取り囲んでいた傭兵達はその人物にから離れ逃げていく。

その人だかりの中から現れたのは、黒いマントに分厚く身の程を軽々と超える

「剣」と言いがたい大剣を担いだ黒髪の男だった。

男の周りに転がる死体は竜巻にでも巻き込まれたかのようにバラバラにきり飛ばされている。

モトは、無防備に男に近づいていく。

男も何も言わず、モトへ一直線に歩を進めていく。

その場にいた誰もがモトの体が飛び散ると予想したが、振り下ろされた大剣は空を斬る。

「ぬう！？ 今の一撃よくぞよけた！！この血の滾る思い、久しく忘れておったぞ。」

「私は、モト。して貴殿は？」

「名乗るほどの者ではないが、どうしても呼びたいのならストーンと呼べ。」

二人とも剣を構え、

「これから」つというところでモトの頭上を飛び越えストーンにいきなり襲い掛かる人物。

突き出された鉄棍を大剣の腹で受け止めるが、ストーンの足がヨロヨロと二、三步後退してしまった。

「今日は、なんと言う日だ。このような強者が二人も現れるとは・・・。」

「モトよ。ここは、オレが引き受ける。」

モトは頷くと二人から距離を置く。

「我は、グラム！！ ストーンとやら、いざ！！」
「尋常に・・・。」

「泄堰I！！v

叫んだ後の両者の得物が間髪入れず金属音を辺りに鳴り響かす。

両者一步も引く事無く、その場での連続の打ち合い。

得物をもった二人の手の皮が衝撃に耐え切れず、ズルズルと皮膚が剥げていき

互いの体に武器があたっていないのに血が飛び交い

衝撃に耐え切れなくなった地面は二人の足跡を戦場を走る馬のものよりも深く食い込ませていく。

やがて、流れが一度切れるとストーンは大きな声で笑い始めた。

「おもしろい！おもしろいぞ！！まさか、このような相手に出会えるとは。」

「お前こそ、我が鉄棍と正面から打ち合いができるとは、大したヤツだ！！」

お互いの得物を地面に突き刺し笑い合う二人は、とても嬉しそうに声を響かす。

その声を掻き消すくらいの空気の振動が街の方から聞こえてきた。

「むむ？勝鬨か。どうやらハイは、街を守りきれなかったようだな。」
一人ブツブツとストーンは呟くと大剣を掴み、瞬く間に逃げていつてしまった。
あまりにもあつさりしていたため、ゼノビアの兵隊達も傭兵も対決していたグラムさえも
呆氣にとられて逃がしてしまった。

マールルの酒場にいるグラムの杯は、酒が一向に減ることがない。
ムスつと顔を膨らませて、不満そうである。

「まあまあ、グラム。また、縁があれば会えるさ。」

モトは、肩を叩きながら少しだけ酒を注ぎ足していく。
その酒にかぶりつこうとした時だった。

町にけたたましく響く鐘の音。

「盗賊団がせめてきたぞー！！」

グラムは今日の出来事の後味の悪さと酒を飲むのも中断されたため
イライラが頂点に達し、物凄い形相で酒場を飛び出る。

呆れながらモトも酒場を出て行く。

モトが外に出たときには、既に戦いは始まっていた。

今日の戦より力の入ったグラムの鉄棍の一撃一撃が

まとめて4～5人を突き飛ばしていく。

人々は盗賊から金品を剥ぎ取られ殺されていく。

女、子供に関係なく虐殺される風景。

人々を助けるモトはグラムと広範囲にわたって盗賊たちの攻撃から
守る。

いくら二人が常人離れした強さでもすべての人を助けることは不可能である。

やがて、盗賊の一人が子供にナイフを突きつけたまま、二人の前に
立つ。

モトは武器を下げる。

「動くなよ。子供の命がどうなってもいいのなら別だが。」

モトにナイフを投げようとした盗賊の手が切断され、痛みで泣き叫ぶ盗賊の体はさらに真つ二つなる。

「人質を捕るとは、野蛮なヤツ等だ。」

「ストーン？」

「貴殿は昼間の・・・話はこの場を切り抜けてからだ。」

竜巻のごとく突き進む三人の得物は夜が明ける頃には真つ赤に染まっていた。

グラムと拳を合わせたストーンはモトの前に膝をつく。

「慈愛にみちた貴殿のために一振りの剣になりたい。我が剣の主となってくれないか？」

手を差し伸べモトは笑顔で

「断つても仲間にするつもりだったぞ。」

握られた手は朝日を浴びてより一層、輝いていた。

「モトよ、次はどうする？」

鉄棍を担ぎ、あくびをしながらモトへ近づくグラム。

「次の街を目指そう。」

三人がむかったラーミディの街はこれ以上とない活気に包まれていた。

街をあげてのパレードの最中だったのだ。

「たまには、いいものだ。」

酒を片手に少し頬を紅く染めながら、陽気なグラム。

「モト殿、グラム殿。闘技大会をやるそうですぞー。見物でもどうです？」

街中を歩き回っていたストーンがモトとグラムのもとへ戻ってきて三人は闘技場へ向かう。

闘技場では、勇敢な戦士たちが自己の技を遺憾なくぶつけ合う。圧倒的なパワーで勝ち上がるもの、観るものを釘付けにするような身のこなしで勝るもの。

己が信じてきた、スタイルを貫き勝負に命をかける。

決闘を見ていた三人の違う方向から今までない声上がる。

「音越えの風読みだー!!」

「ラーミデーの弓使い。待ってました!!」

風読みが音越えと呼ばれる所以は、戦場で風読みが放つ初弾の弓矢に笛がついており

ピー。っと音がする間に何十人という人間を瞬殺したことからいわゆる異名なのだ。

常人離れしたリロードの早さによりなせる技といえよう。

「すごい人気すな。」

「騎士でもないのに随分、有名な傭兵だな。」

「それくらい強いということだよ。」

なるほどと頷く、グラムとストーンは何かを思いついたようでニタニタと笑い始める。

「やるか・・・。」

「協力しますぞ。」

「二人とも何をゴソゴソと?・・・あつ!!」

モトが声をかけると二人は風読みの前に飛んでいった後だった。

「なんだ貴様らは!？」

警備の兵士達が二人に武器を構える。

「祭りだからいいではないですか。」

「少しはスリルがないと客も退屈するぜ。」

「構いませんよ。」

風読みも少し退屈していたのか、兵士達に下がるように言う。

「血を見ない、祭りというのも民は少々退屈だろし・・・。」

二人と風読みの間に20M距離がある。

「さて、風読み殿とやら参りますぞ。」

ストーンが一步前に出ると足の周りに三本の矢が打ち込まれていた。

指の間に挟んだ三本の矢は放つ予備動作も見せず突き刺さっている。

「むむむ。これはグラム殿・・・作戦はβに変更ですな。」

二人とも叫ぶとストーンとグラムは左右に分かれる。

「一方に打ち込む間に、もう一人が襲い掛かる・・・セオリーどうりだな。」

足を狙いに定めた風読みは変な風切り音に気づく。

声にもならぬほどの気合とともに双方は自分の武器を風読み目掛けて投げつけていたのだ。

モトはあんぐりと口を開けて啞然とする。

「ちょ、ちょ!!?」

さすがの風読みもビツクリしてアタフタとしながらも矢を射る。

地響きが風読みの近くで二回すると次に来たのはストーンのラリアット。

鮮やかに空中で回転させられると地面に倒れ、裸締めをグラムに極められ・・・完。

く時刻く

祭りは夜通し行われる。

むしろ、夜のほうが酒場は騒がしくなる。

「○×□つと、言うことで地球のために風読み殿に仲間になっていただきたいのだ。」

虚実を含めたアバウトなストーンの説明を聞かされた風読みは終始

【心、ここに在らず】のような顔で話を聞いていた。

「ウィー。今日も酒がうまい!!」

風読みをオトシタ張本人は、祭りということもあつて酒樽を次々と飲み干していく勢いだ。

「風読みさん、無理にとは言わない。好きにしてください。」

モトは、静かに席を立つと外へ出て行つた。

風読みは、少し酒を飲むとモトの行つた外へ向かい……。

「おもしろそうだから、一緒に行きますよ。」

と、弓の弦をいじりながら返事を返した。

モトは笑顔を返すと再び歩き始めた。

「風読み殿。まあ、一杯やりましょう。」

牛乳の入ったコップを渡し、ストーンが言い寄ってきた。

「お酒じゃないの？」

不思議な顔でストーンを見ると胸を張って返された。

「酒は、飲めぬのです!!」

苦笑しながら、風読みは牛乳を飲み始めたのだった。

モトは、ラーミデイの塀の上で風を受けているところで彼女の顔はどこか虚しそうだった。

静かな塀の上では、少しばかり街のにぎやかな音が聞こえてくるだけで

風の音がよく聞こえてくる。

その静寂な夜を誰かがぶち壊す。

「ガァー。小便は、こういうところでやると爽快だ。」

顔を紅くして、結構酔ったグラムはモトにも気づかず用を足す。

モトが後ろを向き走り去ろうとするところでグラムが気づく。

「おー、モト」 そんなところで小便か？」

「ち、違います!!」

普段の冷静な佇まいとは一転してモトはパニックっている。

「なんだ、可愛いところあるじゃないか。」

大笑いしながらグラムは生理的なことを済ませます。

「からかわないでくださいよー。」

「あー、悪い悪い。ところで次は、どこへ行くんだい？」

「デネブに向かうよ。」

「ほう、街を下っていくか。」

「ええ。そして、王となる器の者を探す。」

「あにいゝゝ！!?」

酔いながらしゃべっているの口が思うように回らない。

「お前が王になるんじゃないのか？」

「違いますよ。私は補佐する役です。すべてを束ねるようなカリスマ性はありません。」

「なんだ、違うのか……。」

残念そうにグラムは俯く。

「まあ、それはいずれ……。」

「ああ、わかった。さあ、飲みなおそう。」

二人が酒場に戻ると、無理やり飲まされたと思われるストーンが苦しそうに吐いていた。

第二話

第二話

ラーミデイの宿屋から四つの人影が滑り出す。

一人は、身の程の鈍く光る鉄棍を掲げ

一人は、身の程を越える分厚い

「剣」らしきものを背負い

一人は、大きな弓を手に持ち、矢の束を担ぐ

最後の一人は一つの鞘に納まった二本の刀を・・・双剣を腰に携えていた。

〔デネブの街・途中〕

四人は道の真ん中で頭を寄せ合っていた。

原因は、先刻モトが出した提案である。

『せっかく、四人もいるのだから二手に別れて仲間を探しましょう。』

□

この意見に他の三人も納得して返事をしたのだが
どのようにして分けるかで問題になっている。

「しょうがない、くじできめよう。」

痺れを切らしたグラムが二つ赤い印をつけた四本の木の棒を差し出した。

「うむ。公平ですな。」

「運に任せて・・・。」

「えーっと。」

それぞれが適当に棒を掴み、取る。

すると、次のようなコンビが結成された。

ストーン&グラムの

「パワータッグ」に対し

モト&風読みの

「スピードタッグ」が結成された。

グラムとストーンは、どこかテンションが低い……というか、落ち込んでいる。

「モトを頼むぞ。」

グラムは風読みの肩を叩く。

「頼みましたぞ！！風読み殿。」なぜか、風読みは眼に涙をうかべる。

「どうしたんだい？」

「痛い……」「では、また後ほど。」

モトはツカツカと歩いていく。「ちょ……待ってくれ……」
遅れて風読みも。

「では、俺らも行くか。」

第3話

第三話

飛来してきたドラゴンの鳴声が白い旋風とストーンの横隔膜に響き渡る。

腰をドツシリと構えていても、吹き飛ばされそうな勢いだ。ストーンは、しっかりと大剣に手をかけ、握りこんでいる。

「おい、ストーン。まさか、こんな伝説上の生き物と殺る気か？」二人ともドラゴンから目を離さずに言葉を交わしていく。

「ははは……。白い旋風殿も人が悪い。」

これから我輩が言うことがわかっておられるのに。」

「そうか……。だが、少しこいつの相手をしてもらわないと。」

ストーンは、あきらめたように視線を送る。

「もって、5秒……。それ以上は。」

「十分だ。恩にきる。」

ストーンが叫ぶと同時に白い旋風は宝刀に向かって走っていく。

ストーンは大剣を目一杯振りかぶると、岩をドラゴン目掛けてきり飛ばした。

ドラゴンは翼で難なく受けきると、勢いよく広げストーンを吹っ飛ばす。

（ち、力の差は歴然。白い旋風殿〜（涙）早くしてくださいー。）

白い旋風は、その風でちょうどこけたところだった。

倒れているストーンの目の前に来たドラゴンは、踏み潰すため片足を大きく上げる。

聞き覚えのある風きり音がしたかと思うとドラゴンの頭部にショテルが当たる。

「ストーン……！ 逃げるぞ。」

待つてました。つと言わんばかりにストーンは涙目でドラゴンの横を走り抜ける。

「シヨテルも効果がありませんな!!」

「はなから効くとはおもわんよ。気休め程度だ。」

宝刀を左手に持って狭い洞窟に再び飛び込む。

「これなら、少しくらいは時間が・・・。」

「いや、無駄だ。」

振り返らず白い旋風は走っていくのを見ると、ストーンは振り返る。

頑丈な岩の壁をチーズのように牙と爪で削り飛ばしてくるドラゴン。

その勢いは衰えることはない。

「ず、ずるい!!」

「こんなヤツが存在しているのだ。理不尽なことなどいくらでもおきる。」

二人は、転がるように洞窟を抜けて外に出た。

その後ろから豪快に洞窟をぶち壊して登場したドラゴンは土に似た色の鱗をしている。

「これは、腹をくくるしかありませんな!!」

「もう逃げても、追いつかれるな。」

しかし、急にドラゴンは大人しくなって後ずさりを始める。

疑問に思った二人は、後ろの人物に目を向ける。

「やれやれ、遅いかと思ったならこんなものが住み着いていたとは。」

「ニセ禅師（殿）!!!」

顔の半分くらいが包帯で隠れているが間違いなく、その人物はそこに立っていた。

「まあ、言いたいことは色々あるだろうが土竜を・・・白い旋風。」

投げ渡された刀を手にするとニセ禅師はゆっくりとドラゴンの前に

歩を進めていく。

すると二人の目の前では、目を疑る光景が再び展開される。

「ドラゴンが・・・後ろに？」

「後退している！！？」

ニセ禅師の残った左目が瞬きをせずドラゴンを見つめる。

後退していたドラゴンは低く喉を鳴らしていたが、突然踏みとどまり口を大きく広げ、襲い掛かる。

カチッ。と音がするとドラゴンの右腕が地面に落とされた。

叫び、苦しむドラゴンは転げるように暴れる。

「お前のおかげで土竜が盗られなかったこともある。命まではとらん。」

ドラゴンは歯ぎしりをしながらニセ禅師を睨む。

常人なら間違いなく恐怖に包まれ、動くことすらできないだろう。

ストーンと白い旋風は、先ほどから動くことができない。

ニセ禅師は息をおもいつきり吸い込むと刀を抜き・・・

「退け！！」

刀の剣先を向け、全身の闘気をドラゴンにぶつける。

瞬く間にドラゴンは空に逃げていった。

ストーンはそのやり取りの終幕にペタリと腰を落とす。

「伝説の生き物を伝説の騎士が・・・」

「さすが地竜王。」

ストーンは、不思議な顔で白い旋風に顔を向ける。

「ニセ禅師の所以だ。デネブに現れたドラゴンを倒したというな。

あの刀は、そのドラゴンの牙と爪で作られたんだ。

しかし、どうしてニセ禅師が？」

「これから、フェイに向かうのだよ。」

白い旋風は、わかったように口元を緩めるがストーンは再び不思議な顔をする。

「しかし、みな姿が・・・。」

「モト達には、デネブに残ってもらった。準備をしてもらうために・

。。

「そういえば風読みと言つヤツから『さらば』と言つ伝言を預かつたぞ。」

「風読み殿から!?　そうですか……。しかし、なぜフェイに?」

「なに、金剛將軍を向かえにな。」

二日を費やし、着いた街

「フェイ」

この街の主導権争いは、ほかの街とは比較にならないほどの激しさがある。

原因は、ここで見つけられる大量のクリスタル。

資金源を確保したいなら間違いなく大国は、ここを狙うのだ。

ちなみに今はのびた国の街となっている。

「ずいぶん広い街ですな。サープといい勝負ですぞ。」

「ここで取れるクリスタルは、かなりの高値で市場に出回っているからな。」

一際大きい宝石店の前に三人は立っている。

「え?ここにですか?　將軍なのでしょう?」

「そうなのだが、商売もする男で名をN^3。」

またの名を金剛將軍、フェイを中心とした地域の防衛を任せていた。

ポトフの国費、約3分の1が彼による財力で賄われていた。」

「なんと!?!」

「しかも、N^3が扱う武器が……。また……。」

白い旋風が少し困った顔を見るとニセ禪師も苦笑いになる。

「まあ、いけばわかる。」

三人が店に入ると、目の前にはいかにも高価なクリスタルが飾られており

周りにも色とりどりのクリスタルがズラリと並べられている。

「おお！陛下！！陛下ではありませんか。」

静かな店内に声が響く。

なにやら光り輝くオーラに包まれた人物・・・というより、光っている。

三人は目を擦りながらN^3を見直す。

「服にクリスタルを散りばめてみたのですよ。」

白い歯を輝かせて、爽やかに笑ってみせるN^3。

三人の顔が引きつる。

「そんなことよりポトフの復国だ。デネブに帰るぞ。」

「待ちに待った時がきたのですか。」

準備を済ませたN^3と共に三人はフエイを後にした。

荒野を馬で駆けながらニセ禅師の隣にいるN^3。

彼の剣を携えるところにある袋が気になるストーンは白い旋風に聞くが

何度、白い旋風に聞いても

「おもしろいから。」つという返答しかこない。

一人の疑問を残しながら、四人はポトフを目指した。

「デネブ」

「どれ、派手に暴れるぞ。全員準備はいいか？」

ニセ禅師がモト達に声をかける。

「数は500だ。外と中から同時にしかけるぞ。」

「驚くだろうな。この守備の数では。」

白い旋風のあとにグラムがおもしろそうに喋りだす。

「モトさん、いよいよですね。」

「ええ、この日を待っていました。ポトフの復活を。」

沙羅とモトは、握りこむ武器に力が入る。

「よし、いくぞー!!」

ニセ禅師の合図とともにデネブ侵略が始まった。

この日を境に再びポトフが復国を果たした。

その情報は、ポトフを支配都市としていた『のびた』にすぐに渡った。

それを聞いた 闇の女王・こすずめは不敵な笑いを響かせる。

「随分と利子つきで復活したものだな。」

「早急に・・・。」

「いや、そのまま泳がせておけ。」

「よろしいのですか？」

「ああ、ちょうど退屈していたからな。」

再び、こすずめの笑い声が部屋に響いた。

第4話

第四話

ポトフ復国と三代目・国王 白い旋風の就任式から三ヶ月。

都市が一つしかないポトフの守備陣は集中して他国からの侵略を阻止していた。

その指揮を主に任されていたのは、軍師・モト。

彼女の指揮により侵略は阻止されているものだった。

もちろん、彼女の指示により動く数々の精鋭のおかげでもある。

大將軍・ニセ禅師

將軍・N^3

衛兵長・沙羅

暗部長・ナチ

遊撃八驃騎軍の1番隊・2番隊隊長 グラム・ストーン

彼らの功績がなければ今のポトフはなかっただろう。

そして、新たな作戦『マーラル奪還』が始まる。

マーラル奪還

ポトフのもう一つの拠点・マーラル。

今、この都市は火の国・ローデイスの支配下に置かれていた。

大国であるローデイスの領土は広い。

そのため守備陣の人数をある程度、均等にしなければならなかった。

軍事会議により決定された命令は、『マーラル奪還』

兵達の士気は日に日に高まっていく。

無論、幹部達も・・・一人を除いて

ニセ禅師は土竜を壁に掛け、ジッと見つめている。

（オグマ様……私は、まだ土竜を使いこなせていません。どうしたら？）

彼は、今日も寝付けずにいた。

「……はあ。明日は、戦だというのに。」

外を見ると月は眩しいくらい輝いていた。

その幻想的な世界の下では、ナチが投げた石をストーンが打ち返しており

グラムはすごく酔っているらしくモトに酒を勧めつつ追い回し

N^3はナンパに失敗したのか隅っこで宝石を弾いている風景が展開されていた。

「大丈夫か？この国。」

彼は今になって心配になってきた。

そして、今日も寝つきが悪かった。

一夜明けたデネブから沢山の兵隊が出てくる。

霧に包まれた朝の空気は新鮮で清々しい……ニセ禅師は器用に馬上したまま眠る。

マーラルに着く頃には、全軍の士気は最高潮に達しようとしていた。準備は着々と進められ、モトの合図とともに遊撃八驃騎軍が突入した。

ストーンとグラムの隊の奇襲により、相手の陣形はバラバラに乱されていく。

混戦になるとさらに周りから兵が取り囲んでいく。

兵の数はポトフのほうを上回っている。

ニセ禅師もモトも遠くからその風景を観察している。

「時間の問題ですね。」

「ああ、これならマーラルを奪還できる。」

二人が安心して話しているときだった。

突如、戦場の中心から高々と火柱が舞い上がる。

「な、なんだ！？ あれは！？」

モトは、驚きながらも馬に跨りその場に向かう。

ニセ禅師は見覚えのある火柱に冷や汗が頬を伝っていく。

「このようなところに炎王直々にだと！？」

モトに遅れつつニセ禅師も急いで向かった。

敵味方関係なくその場にいた全員は動きが止まる。

無論、ストーン・グラムも・・・。

「随分、粋のいいのがいるじゃないか。だが、これ以上は進みませんぞ。」

ニセ禅師と同じ型の紅い刀を持っている人物こそ、この火柱を起こした張本人。

「はい、そうですか。言える状況じゃねえぞ。」

「何者が知らぬが我輩等もここで止まるわけには、いかぬ。」

「ほう、今の炎では温いか。ならばこちらも少し本気でいくか。」

「ぬかせ！！！」

グラムが渾身の一撃をはなつと男は、いともたやすく刀でいなした。

構わず、グラムは次の攻撃を仕掛ける。

すると、男は地面に刀を突き刺した。

「もらった！！」

その言葉の後にグラムは高々と舞い上がる炎に数十mも後方に吹き飛ばされた。

「二番。ストーン！！」

不意打ち気味に振り下ろされた大剣を片手でもった刀で簡単に受け止める男。

ストーンは歯を食いしばると全身の力で男を後退させようとするがまったく動かない。

「こ、このような細身の体で・・・なんという怪力。」

「力だけじゃない。」

言葉の後にストーンは大剣に違和感を感じる。
と、いうよりものすごい熱さを感じる。

見ると、大剣に半分ほど刀が食い込んでいる。

「なんと!？」

刀と交えている部分が真っ赤になり、刀身が溶けているのだ。

男が斬り飛ばすと大剣は、上半分が飛んでいつてしまった。

「これは……一体？」

「我が名は、炎王・ルシード。楽しかったぞ、ストーンとやら。」

刀から放たれた炎はストーンを一瞬で包み、その場に昏倒させた。

「ストーン!? グラム!? 貴様あー!!!!!!」

飛び掛ろうとしたモトだったが、ニセ禅師が静止させる。

「軍師よ。周りの指揮をとれ。今や我が軍の指揮はバラバラだ。」

「しかし!!」

「こやつは、私が止める。」

有無を言わせぬニセ禅師の片目がモトを冷静にさせる。

モトは残存の兵を集め、隊列を整えていった。

「だれかと思えば、二代目ポトフ国王・ニセ禅師ではないか。」

「よもやこのようところで貴様に会えるとはな……ルシード。」

「これもまた運命。^{さだめ}」

「それも、よからう。」

抜刀された刀同士が美しい金属音を奏でた。

「さすがオグマが認めた男。刀技については私と同等……もしくは。」

張り詰めた顔で追い詰めていくニセ禅師。

彼の刀はもはや常人には見ることもできぬ領域まで進んでいる。

「だが、お前は本当の地竜の力を引き出せていない。」

その言葉にニセ禅師の動きが止まる。

「我等が扱いし、火竜・土竜・水竜・風竜。これらの刀には精霊の

力が宿っている。

その力を使えば、一つの都市を破壊することなど造作もないことだろう。

しかし、お前は未だに力を引き出すことができていない。

どうしてだと思う？」

ルシードの言葉にニセ禅師は唾を飲む。

「お前は、そのような器ではなかったのだ。」

今の言葉は彼の心を十分に動揺させるものだった。

顔にこそ出さないが、ニセ禅師の動きが極端に悪くなるのが誰の目からもわかった。

その隙を見逃さなかったルシードの一太刀がニセ禅師の腹部を切りつけた。

片手を止血がわりに被せるが思いのほか出血が酷い。

それでもニセ禅師は片手以外は体勢を変えなかった。

「だからと言って、私は土竜を手放すわけにはいかんのだよ。

偉大な王に託されたこの刀を。」

「見事！！だが容赦はせん。」

振り払った刀から勢いよく炎が出され、ニセ禅師の体を焦がしていく。

だがニセ禅師の膝はおれず、地につくことがない。

「このまま、チリと化すか？」

ニセ禅師が刀を大地に突き刺した瞬間、ルシードは異変にいち早く気づいて回避した。

「私は、死ねないのだよ。オグマ様に会うまでは。」

地面から突き出た石がルシードまで少しのところまで止まった。

「これが限界か・・・さあ、我らが永き因縁に勝負をつけようではないか。」

刀が炎に包まれニセ禅師へ迫ってくる。

突如、ニセ禅師の前に壁が突き出し無数の石柱がルシードの左右に出現すると倒れてきた。

下がろうとするが後ろにも壁が用意されており、逃げ場所がなくな
った。

「調子にのるなよ。」

刀を叩きつけると同時にすさまじい爆発が石柱・壁を粉碎した。

「ふざけた真似を。オグマ!!」

驚いたニセ禅師は残った眼で後ろを振り返る。

遙か遠くにいる人物・・・しかし、その瞳にはしっかりと見える。

「オ、オグマ様!!!」

「久しぶりだなニセ禅師・・・そして、ルシード。」

オグマは遙か遠くにいたはずなのに、すでにニセ禅師の近くまで来
ていた。

その異様な雰囲気には味方であるはずのニセ禅師に鳥肌を立たせる程
である。

「さて、続きといこうか。ルシード。」

オグマは剣を抜き、ルシードに向けて構えられ、ニセ禅師の刀もル
シードに向けられた。

「王クラスを二人も相手するほどバカじゃないんでね。」

刀を納めたと同時にルシードの立ち位置だけが大きな影で覆われた。
上を見上げた二人の目に飛び込んできたのは、まぎれもなくドラゴ
ン。

舞い降りてきたドラゴンに飛び乗ると瞬く間にその場からドラゴン
は空に行ってしまった。

「ドラゴン使いのしゅうか。ルシードめ、遊びにきたただけだな。」

少し悔しそうに手を叩くオグマはドラゴンが見えなくなるまで視線
を外さなかった。

「いいのですか？マーラルは。」

「何、ポトフ復国の祝いだ。全軍撤退させたのだからほぼ被害もな
いさ。」

ルシードの答えにあきれたしゅうかは、それ以上の質問をあきらめた。

「それで、オグマ様。一体今までどこへ？」

オグマを前にポトフの幹部一同が揃う。

「ワシの後継者を探しにいていた。」

一同、驚きの表情で後ろから入ってきた男に目を向ける。

「名をツヴァイ。歳は幼いが、これがなかなかの才の持ち主。」

「っと申しますと、この男……。」

ニセ禅師が聞き返すとオグマは待つてましたと言わんばかりに口を開く。

「精霊の力を扱える器だ。」

再び一同は、驚きに包まれた。

第5話

第五話

「ちいゝす。」

軽いあいさつとともに片手を挙げる男に全員が反応に困る。

「なんか、お堅い人の集まりっすねえー。オグマさん。」

「ぶ、無礼な!!」

一番初めに反応をしめたのは、沙羅。

オグマに対する無礼に腹を立てたのだ。

「いいのだ、沙羅。“今”は気にするな。」

笑いながら沙羅に視線を合わせると沙羅は一步出した足を退いた。

「まあ、色々と言いたいことがあるかも知れんが今は時間がおしい。

ポトフのドラゴン使い・バーンのところへツヴァイを連れて行って欲しいのだ。

この任務には沙羅ともう一名でむかって欲しいのだが・・・沙羅よ

推薦するものがあるか？」

展開の速さに困っている大勢を無視して沙羅に質問をするオグマ。

「軍師・モトと共にいいでしょうか？」

「わしは構わぬ。いいかな？白い旋風。」

白い旋風は静かに頷いて見せた。

「よし、明朝一番に頼むぞ。」

そついうとオグマは部屋を足早に出て行くこととする。

「こ、国王！？どちらへ？」

「まだ、やることが色々あるんでな。修行に励めよニセ禅師。」

「は、はい・・・あ。」

ニセ禅師が呼び止めようとするのを無視してオグマの姿は消えてし

まった。

「早っ!!」

グラムの一言が部屋に響いた。

明朝、デネブの門が開かれ中からモト・沙羅・ツヴァイが出てきた。

「くれぐれも自分勝手な行動は慎むように。」

沙羅はツヴァイに念を押すように言い聞かせる。

「わぁーてるって、衛兵長の姉ちゃん。」

「ね、ねえちゃん!? お前、目上のものに失礼だろう!」

「いーじゃねえか。もう、城の中じゃないんだから。」

「お前、礼儀というものは・・・ブツブツブツ。」

モトは後ろの二人の会話に少し間が抜ける。

（冷静さが売りの沙羅さんをあそこまで怒らすツヴァイもめずらしい。）

それからルネーシャに着くまでに何度、沙羅とツヴァイは口喧嘩をしたことか

モトはもうこの旅が嫌になっていて、半泣きで続けていた。

着いたころには、モトの涙は枯れているとかいないとか。

宿に泊まり、バーンの居場所を記した地図を見ながら相談する三人。

「また、ものすごいところに住んでるおっさんだな。」

バーンが住んでいるところは山の頂上付近、断崖絶壁の場所であった。

「なんでも、闘うことに疲れ誰も近寄らない、自分の好きな山に登って住んだんだとか。」

「なんか陰気。」

「だから失礼なことを言うなと旅の最中に何度も何度も・・・ブツブツブツ。」

「（お願いだから喧嘩は後にしてよ）森を抜けてから、絶壁を登ることになりますから

装備をなるべく軽めにしなければなりませんね。」

時既に遅く、二人にはモトの声が聞こえることはなかった。

（私、こなくてよかったんじゃ・・・。）

結局、夜遅くまで続けられた討論はモトを安らかに眠らすことなく彼女の目の下にクマを残すほどのダメージを刻んだのであった。

「さあー！ 出発だー！！！」

大きな声で宿を出るツヴァイ。

帽子を触りながら沙羅もでてきたが、モトの足取りは遅い。

「おい、朝っぱらから なんてひ弱な歩き方だい？」

「モトさん、どうしました？」

二人に対して言いたいことが沢山あったが、もはやそのことを口にすることが

できないほどモトの精神状態は不安定になっていた。

「いいえ、なんでもありません。」

一方、ポトフの城ではグラムとストーンがニセ禅師に話をしているころだった。

「俺たちに精霊の力を使うことはできないのか？」

ニセ禅師は無表情のまま、言葉を返す。

「それは無理だ。」

「どうして!？」

「無理なものは無理なのだ。」

「訓練をすれば、身につけれるものではないのですか？」

ストーンがさらに迫って聞くが答えは変わらなかった。

「こればかりはどうにもならないのだ。人は生まれつき精霊の属性を持つものが

稀にいるが、ほとんどの人は無なのだ。こればかりはどうにもな

「らんのだ。」

「じゃあ、俺たちは・・・。」

グラムは残念そうに肩を落とす。

「まあ、それでも貴殿たちは十分に強い。日々、精進せよ。」

人は人のまま、強くなるには多くの犠牲を払わなければならないのだから。」

ニセ禅師はそういうと二人をあとに部屋を出て行った。

「多くの犠牲？」

グラムはわけが分からなくなった。

そのころ、モトたちは森を抜けてバーンが登ったといわれた山を発見した。

「こ、これ登れるのか？」

ツヴァイがそういうのも無理はない。

90度、直角の断崖そのものだった。

「この山の後ろに周っても、谷しかないのだからこちらを登るしかないまい。」

三人は死に物狂いで崖を登り始めた。

本当にこんなところを人が登っていったのか不思議なくらい厳しい難関が用意されている。

「バーンとやはらトカゲが何かの類か？」

「これなら戦のほうが生存率がたけーよー!!」

「戦はしたことないだろう!!」

「うるせえー!!!! 例えだよ例え!!」

「お、お願いだから、こんな酸素の薄いところで喧嘩しないで。」

もう、モトの涙を止める術は残されていなかった。

三人が頂上付近についたころには夕陽が見え、感動の瞬間だった。

「こんなところ、よく登れたな・・・。」

心底疲れきったツヴァイは腰を地面につけて座った。

「あそこにある小屋がバーンさんが住んでいるところだろう。」
もちろん、周りに家など存在しない。

平べったい場所にポツンと一つ小屋があるだけである。

「ごめんくださ〜い。」

扉を叩くと中からでてきたのは普通の人にしか見えない人物だった。

「あつら〜、珍しい。人間の顔なんて2年は拝んでなかったぞ。」

「ポトフの衛兵長・沙羅と申します。こちらは軍師・モトとオグマ様からここに来るよう

に言われたツヴァイを連れてまいりました。」

「お〜、ついにオグマ様は後継者を探しおったか。

まあ、話の中で休んでゆつくりしようじゃないか。」

三人は用意された食事を食べながらバーンと今のポトフについての話をしていく。

「オグマ様はバーンさんに何とおっしゃったのですか？」

「私が引退するといったら、ワシの後継者を育ててくれって言うてきたよ。」

つまり、ツヴァイはここに住まなきゃならないな。」

飲んでいたスープを暖炉に向けて噴出すツヴァイ。

「はあ！？なんでこんなむさ苦しいところに俺が？」

沙羅はお約束どうりにツヴァイの頭をすばやく叩く。

「バカもの。バーンさんはわざわざ、お前の先生になってくれるのだぞ。」

それをなんだ！ えー！！ ブツブツブツブツ……。」

沙羅のお説教がはじまると同時にモトは耳に紙を詰めて、もくもくと食事を食べていく。

バーンは紙に字を書き、モトに見せた。

『いつも、こうなのか？』

モトは生気のない目で首を縦に振って見せた。

（この親にしてこの子ありってか……衛兵長のおっさんとそっくりかい。）

肉を切りながらバーンは思い出し笑いをしていた。

突然、バーンは槍のようなハンマーをツヴァイに差し出した。

「な、なんだよ。」

驚いたがツヴァイは差し出されたハンマーを掴んでみる。

「う？おおお！！！！？」

バーンが放した瞬間、ハンマーは地面に勢いよく落ちてしまいツヴァイは手の痛さに目をパチパチとしていた。

「お前が扱う新しい武器だ。」

「こんなクソ重い武器なんか使えるか！！」

「今は無理だがいずれ精霊の力を扱えるようになれば、どんな武器よりも

軽々と扱えるようになるさ。」

武器を収めながらバーンはツヴァイに語る。

「それにもっとすごいことができるようになるぞ。」

バーンは嬉しそうに笑うと三人に寝るようにいった。

三人はお腹がいっぱいになると朝の疲れもあり、ぐっすりと熟睡してしまった。

朝日があがると共にモトと沙羅は目覚める。

荷物をまとめ、外に出るとバーンが待っていた。

「もう、行くのかい？」

「はい、それでもポトフは大変ですから。」

「そうか・・・なら、モトとやらこれをもっていけ。」

そう言われて、モトに手渡されたのは・・・。

「双剣？」

「蛇剣といって、波型の刃をしている。あと大地の精霊の加護を受けた神具だ。」

モトは蛇剣をみながらバーンに言う。

「なぜ、私に？」

「なんでだろうな。君なら扱えるような気がした。」

丁寧二人はバーンに礼を済ますと崖を降りようとしたときだった。

「まあ、待て。もうちょっとで私のペットがくる。」

「へ？」

まぬけなモトの声が響いたとき反対の谷側の崖から大きな大きな蛇が現れた。

「だ、大蛇！？」

「あわてるな。私のかわいい竜ドラゴンさ。」

翼がない三つ目の大蛇は高らかに鳴き声をあげる。

「乗るがいい。森をぬけるまで一瞬ですむぞ。」

バーンは大笑いしながら二人に手を振った。

「ツヴァイは責任をもって、私が戦士しよう。みなにそう伝えてくれ。」

バーンを見た二人はゴクリと唾を飲む。

「ここを一気に・・・。」

「モトさんもうしゃべらないほうがいいですよ。」

バーンが手を挙げたと同時に大蛇は直角の崖をそのまますべり降りていく。

鱗につかまっている、二人の顔は引きつり死を予期したような表情になっていく。

グッタリした二人を静かに降ろすと大蛇は森へすごい勢いで帰っていった。

沙羅は力無く呟いた。

「殺す気ですか・・・。」

モトの涙は枯れていた。

第6話

第六話

ある日、デネブの城に風の使者が手紙を届けにやってきた。

その送り主は、風の国・国王 朝日洗蔵。

新大陸をみつけた『のびた』に並び、あらたな領土を求めるのに
二国の力を合わせようという内容だった。

「奪うよりも、見つけるか・・・。」

考えながら白い旋風は頷いた。

本大陸から新大陸に向かうメンバーがポトフとハイランドから選抜
された

ポトフ代表 モト・グラム・ストーン

ハイランド代表 アルカード・風読み

モト達、三人は顔見知りの風読みに笑顔で会話がはずむ。

風読みは、そのたぐい稀なる才能でハイランドの將軍の一角になっ
ていた。

そして、もう一人の人物は、ハイランド軍師・アルカード。

彼女はローブに身を包んでおり、それ以外 武器と名のつくものを
持っていなかった。

「アルカート殿、我輩ストーンと申します。そして、こちらがグラ
ム殿です。」

「うむ。よろしく。」

アルカートは双方にあいさつを済ますと船の先頭に向かった。

「なんか、堅い性格っぽいな。」

「そうですね？女性はあるくらいが丁度いいかと。」

頷きながら手を組むストーンを無視してグラムは船に酒樽をドンド

ン運んでいった。

海は、平穏でこれといった事も起きず、順調に新たな大陸へ進んでいく。

到着したときの作戦などを細かく話し合う、風読み・モト・アルカード

グラムとストーンは地平線を眺めながら、呆然としていた。

「ストーン。」

グラムは目を遠くにやっただけ、話しかけてきた。

「俺たちは・・・無力だな。」

「・・・はい。」

「このままの力でポトフを守れるだろうか？」

ストーンは、言葉を返すことができなくなってしまった。

前の戦いのときといい、国の一角の人物達は“精霊の力”を扱い戦い自体が常人を遥かに上回っていた。

もう、人間の力だけでは勝てない領域に入っているのである。

（どうすれば）

ただ、その言葉だけが二人の頭を埋め尽くしていく。

そんなことを考えていたが、やがれ船は目的の大陸に上陸した。

装備を整えながらグラムは顔を叩いて気合をいれた。

ついた浜辺に人らしきものは、これといって見つからない。

「野営地がもつと先にある。そこに仲間もいるからまずはそこを目指す。」

アルカードは全員に指示を出すと先頭隊に出て、道案内をしていた。

野営地は、小さな村くらいの規模だったが寝食をするには最適な環境に整えられていた。

食料の確保もできており、

ずいぶん前から物資の補給などが盛んに行われているようだった。

「ここで暫く休んだら作業にかかるぞ。」

今回はかなりの大掛かりな都市の建設で

人数のほとんどがこのために用意された人員である。

つまり、グラムとストーンの役目は最低限の人数での護衛である。

しかも、人間ではない“トロール”と言うモンスター。

のびたの軍勢力はこれを容易に防いだが他国は、そうはいかない。

協力なくしての都市建設は、はつきりいつて不可能に近い。

たびたび20〜30匹の数でくるトロールたちをグラムたちは防いでいたが

ある日……。

「なんだあれは？」

監視役の兵が近くの山を眺めていると砂煙がバタバタとあがる風景が目映った。

山から下りてきたそれは少なくとも300以上の数だった。

その情報を聞いたアルカートはただちに人員を避難させた。

「おい、このままトロールにメチャクチャにされてまた1からやり直すのか？」

グラムはアルカートにむかって声を張り上げた。

「先ほどから何百回も言ったが、こちらは圧倒的に戦闘員が多いのだ。

避難させるしかなかるう。ただで際、間に合わないのだから。」

「よし、なら時間を稼いでやる。その間に全員を避難させる。」

「ちよ、ちよつと待て!!」

アルカードが止めようとするがグラムとストーンの部隊はトロールの方へ向かっていった。

明らかな劣勢にたたされながらもグラムたちは踏ん張っていた。
グラムの鉄棍はトロールたちの口にぶち込まれ、脳を吹き飛ばしている。

矢継ぎ早に攻撃してくるトロールに怯むことなく蹴散らす姿に畏怖

すら感じる。

地面ごと叩きつける大剣がさらにトロールたちを後退させるが戦力差が持久戦になったため響いた。

「このままでは、野営地に侵入されてしまいますぞ!!」

二人の動きが一瞬だけ止まったときだった。

一斉にトロールが手持ちの斧を無数に投げつけてきたのだ。

足や腕に食い込んだ、斧の刃は二人の膝を簡単に地に押し付けた。

「こ、こんな雑魚ごときに・・・。」

二人がその場でしかトロールに対抗できない間に後ろへの進行を許してしまったのだ。

その直後、大地はものすごい地響きを立てて割れ、トロールたちを止めてしまい。

降り注ぐ矢はトロールたちを後退させてゆく。

「二人とも、無事か?」

その後にアルカードはグラムたちに駆け寄ってきた。

「今のは?」

「風読みとモト軍師とやらの精霊の力だな。」

「なんと・・・。」

二人は立てるような状態でないまま、無理やり立ち上がろうと各々の武器を

大地に突きたて、立ち上がろうとする。

「バカ!! 出血がひどいんだ。もう休んでいる。」

アルカードは二人に座るように命令するが尚も二人は立ち上がろうとする。

「前の戦で失態をさらしたんだ。もう二度も裏切るわけにはいかない!!」

グラムは膝を揺らしながらなんとか立ち上がる。

「我輩はモト殿に忠誠を誓う一振りの剣となったのだ。ここで止まるなど・・・。」

前のめりに大剣に寄りかかりながらもストーンも立ち上がってみせ

た。

それを見ていたアルカードは少し微笑んで見せてみた。

「ポトフはいい駒をもっているな・・・いや、モト軍師がかな。」

そついうとアルカードは両手を合わせて、しばらくすると大地に両手をつけた。

「どけ・・・トロールども。」

アルカードの前に現れた小さな旋風は

やがて大きな竜巻となりトロールたちを飲み込んでいった。

「何をした？」

グラムは息を絶え絶えにアルカードに話しかける。

「これも精霊の力さ・・・みんなは避難しているから、味方に被害はない。」

「これも・・・精霊？」

グラムは八つ裂きになっていく大量のトロールを見たまま、意識を失ってしまった。

目を開けるとそこには眩しく月がギラギラと輝いていた。

「強くなりたい。」

グラムは聞こえてきた声の主に目を向ける。

「ストーンか・・・そうだな。」

二人は体中、包帯だらけで夜風に当たっていた。

「そんなに強くなりたいか？」

二人は目をいっぱいに見開き、アルカードを見る。

「だが、お前たちには精霊の力を扱える器じゃないぞ？」

「ああ、もうそれは聞かされた。」

「人は人のまま強くなるには、多くの犠牲を払わなければならないと・・・。」

「ならば、その多くの犠牲とやらを払ってまで、守りたいものがあるのか？」

グラムは言った。

「己が信念を貫くための強さを。」
ストーンは言った。

「守るべき人を守る強さを。」

アルカードは双方に言った。

「ならば、各自の武器を掲げるがよい。そして、私が言う忠告をよく聞け。」

双方の武器はアルカードが触ると少し青光りを見せると静かに元に戻った。

その日を境にグラムとストーンは強大な諸刃の剣を得たのであった

第7話

第七話

ネスにある城の地下訓練場。

肩で息をしながら、大量の汗を地面に落とす青年がいた。

「もう少し長く、っ！！ 変わるように……。」

「戒、もうやめとけ。死ぬぞ。」

声の主に顔を向けようとするのと投げられたタオルで視界が塞がれる。

「……らく先輩。」

らくの手背には小さいが真新しい傷がついていた。

「めずらしいっすね。らく先輩が傷を負うなんて……何十年ぶりっすか？」

「ああ、これか。」

少し傷を見ると、らくの口元が緩む。

「久々に、規格外の無鉄砲な奴等がいてな。」

「へえ、聞かせてくださいよ。その話。」

おもしろそうに、らくが口を開いた。

ある日、食事中にこすずめはらくを呼び出した。

何の用かと足を運ぶと

「ポトフの戦力がどの程度のものか、マールを攻めてみよ。」

との、ことだった。

大国であるのびたが本気を出さずとも、小国のポトフは滅ぼすことは可能。

別の言い方をすれば

「おもしろければ生かせ、つまらぬなら滅ぼせ。」で、ある
らあくもその考えと同じだ。

それから、すべての準備が整ったのは三日後だった。

マーラルにはモト・N3・グラム・ストーンの部隊が守備について
いた。

「今宵も美しい。ぼくの愛の結晶。」

お気に入りのフェイのクリスタルに接吻をするこの人物こそ
ポトフ国・將軍クラス、別名 金剛將軍ことN3である。

彼の趣味はクリスタルの発掘とそのカット及び見て触れることであ
る。

故に部屋の中は一週間もせぬうちに、宝石だらけになるのだ。

「なんて、心強い輝きなんだ！！！！」

今日も彼の磨きには余念が無い。

彼の宝石に対する想いがMAXになった瞬間だった。

「N3將軍！！の、のびた国の兵が攻めてきました！！！！」

「えゝもう、来ちゃった？」

残念そうに彼は持っていた宝石を箱にしまった。

「それじゃあ、しっかりと印象づけておきますか。潰されないよう
に。」

みなに予め想定しておいた作戦の最終確認をした後、広場に集めた。

「いいか。この戦いは、ポトフが存続できるかできないかの重要な
戦いだ。

奴らが簡単にここマーラルを落としたり、近いうちにデネブを落
とし

ポトフを滅ぼすだろう。そうならぬように奴らを痛い目にあわせ
てやれ！！

そして、100%勝てる気持ちで戦え！！」

のびたの兵力に叶うわけは無く。これは、試されている戦いなのだ。

しかし、負けを宣告されたわけではない。

勝つつもりで戦う。が前提であり、彼以外もその想いと同じだ。そして、彼は戦の先陣に立っていた。

マールから南に20kmある森で、のびたの兵らは待機していた。

森は霧に覆われ、両軍とも目を塞がれた戦いだった。

「ここは凶だろうな。」

確信はないが、長年の感である。

「それでは、街のほうに……。」

「うむ。ここのは引つかかった状態で連れてきてくれ。」

「御意。」

モトはグラム達に作戦の内容を話す。

「無論、何が仕掛けられているかわからないが……。」

「いいって、俺らに任せとけよ。」

「使命はかならず果たします。」

三人は頷くと兵と共に森に向かう。

「なんだか……おかしいぞ。」

はじめに異変に気づいたのは普通の兵たちだった。

そんなに長い距離を歩いたわけでもないのに、なぜか疲労感が目立つ。

「もしかして……すでに罠にかかっちゃった？」

モトは全軍の進行を止めると、隊形を整えた。

「来るぞ。気を引き締める!!」

森の木で太陽の光は遮られ、霧でさらに不気味になった中で現れた敵軍の姿に

誰もが息を呑む。

髑髏の兜をして全身が黒い鎧に覆われたものが歩いてくる。

（これが敵だと!?!）

今までにない局面に恐怖という感情が次々と伝染していく。

怯むなど、モトが大声でいうが弓の一斉射撃で倒されていく。

このままでは、いたずらに兵が激減してしまうと思った

モトは、蛇剣を地面に突き刺した。

しかし、何も起ころうとはしない。

「この、場所・・・別の属性が覆っているのか？」

大地属性の蛇剣は一向に反応しなかった。

「くそ！！各自、戦闘しながら後退だ！！」

溢れるように出てきた髑髏の軍勢は先頭の部隊に襲い掛かる。

兵士の弓矢が敵兵に命中するが鎧の前にはじき返された。

剣も斧も鎧にはじかれ、ダメージどころか鎧に傷をつけることさえできない。

（どこかの精鋭部隊だろうが、まさか一般兵でこれほどの差がでるとは。）

彼女は剣刺を抜刀して、首や脇の部分を鮮やかに突き刺していく。

「鎧で守られていないところを狙え！！」

それでも兵らは良くて相殺、ほとんどが一方的な展開だった。

グラムの鉄棍の一撃は相手の鎧をいつものようにヘシャグことができず

弾き飛ばすことしかできなかった。

無論、ストーンも同じような状況。

「じゃあ、上からいくぜ！！」

掲げた鉄棍は勢いよく振り下ろされ、頭から打ち下ろされた。

行き場を失った衝撃は地面から足に跳ね返り鈍い音を響かせる。

「足が折れたくらいか？ぬん！！」

さらに力を込めた一撃は鎧を破壊することに成功した。

その光景に周りの敵兵は動きを止めた。

余程のことがない限り、この鎧が破壊されるなどということはないのだらう。

「なんだよ？死にたいヤツからかかってきな。」

振り回した鉄棍は次々と頑丈な鎧を叩き壊していく。

「死に損ねたら痛いぜ。」

エンジンのかかってきたグラムはさらにスピードが増して森の奥へ進む。

たしかに、敵兵は完璧な鎧で守られているが動きは決して早いものとはいえない。

それでも常人から見れば、普通速度であるのだが。

「ほう、大砲に当たっても壊れない鎧なんだがな。」

聞こえてきた声の方向にグラムは鉄棍を向ける。

その異質の空気にルシード以来の圧迫感を感じ取ったのだ。姿を現したらあくにグラムは手に汗握る。

「あんた、人間かい？」

思わずでた、グラムの一声にらあくは笑う。

「これからわかるさ。」

剣を抜いたらあくの姿が彼の目にはさらに大きく見えてきた。

（アルカード・・・さっそく、使うかもしれんぜ。）

歯を食いしばると回転しながら左に鉄棍を振った。

その風がブワツと霧を飛ばすが、らあくも霧と同じように鉄棍を避けた。

静かに振り下ろされた剣を今度はグラムが避ける。

音が激しいグラムに対し、らあくは静かに剣を振る。

一部の無駄のない、その一刀一刀にグラムの神経はすり減らされていき

彼に疲労感をジワジワと浸透させていく。

（こんな戦い、初めてだ。）

時間にしてはまだ短いのだが、彼にはそれが永い永い苦しみにすら感じてきた。

当たったはずの一撃は空を斬る感じしか起こさず

すぐに後ろに気配を感じ、またそれを避けるの繰り返し。

いつまで続くかわからない感覚がグラムを焦らせ苛立たせる。

「いつまで続くんだ!？」

頭を叩いてみるが意識すらはつきりした状態ではなかった。

「お、俺はあと何回戦えばいいんだ!？」

急に彼は息苦しくなり、地面に膝をついた。

後ろから剣を振り下ろした音が聞こえる。

そして、別の方向から違う音も。

何かが折れて倒れてくるような。

その直後、彼の体は宙に浮き上がる感覚を得た。

目を閉じて、再び開くと目の前には大きな木が倒れている。

「ギリギリ間に合いましたな。」

彼のそばにはストーンがいる。

わけもわからず、頭の中はカラッポになったように軽い。

「何か術をかけられていたのでしょうか。この空間は好都合ですし。

モト軍師が気づかなければ、私も術の中でした。」

「どうすれば術にかからない？」

「たぶん、キーワードは単独でしょう。

誰かと会話をしていれば術にかかることはありません。」

「俺はまんまと……クソっ!!」

「グラム、一人で倒せるような敵じゃないことは感じたでしょう。

ここは力を合わせて切り抜けるんです。」

モトの言葉にグラムは頷いた。

「さあ、ここから本番だ!!」

らあくは三人の頭上から剣を振り下ろしてきた。

鉄棍と大剣が左右に剣刺が下から突き上げられた攻撃を同時にする

が

鉄棍を素手で大剣を剣で剣刺を口により受け止めていた。

三人は即座に離れ、男に構えなおす。

「なに食べたたらそんな歯になるんですか？」

言葉とは裏腹に顔に余裕は無い。

（今ので三人、束になっても勝てないことが証明された。）

グラムとストーンは目を見て、互いに頷いた。

「ストーン、モト軍師を連れて森をでろ。」

グラムは落ち着いた声で言った。

「そんなことをしたら、また術にかけられるぞー!!」

「モト軍師、もうグラム殿は大丈夫です。」

ストーンはモトの腕をひっぱりその場を離れようとする。

「ちょ、ちよつと、待ってくれ。」

「今は!!我らの言葉を信じてください。」

ストーンはさらに力強く、腕をひっぱりモトをその場から連れ出した。

残ったグラムはゆっくりと目を閉じ、息を吸い込んだ。

「勝てぬと踏んで、お前が二人の犠牲となったのか？」

「馬鹿。負ける気なんてサラサラねえよ。」

「ほう、いつまでそういつていられるかな？」

「てめえが地べたに這いつくばるまでだよ。」

すると、グラムの鉄棍は青く光はじめ、体の血管を浮き上がらせて肌は紅く紅く変化していった。

（グラム殿……ご武運を。）

ストーンは振り返ることなくモトを森の外に連れて行った。

第8話

第八話

ルネーシャの名所の滝を越えた深い森の奥にある山岳。

そこを登る青年の体は生々しい傷が刻まれており、背負っている木は人間クラスの重量。

断崖の頂上に着くころには全身に汗が滝のように滴り落ちる。

「それじゃあ、今度は川から水を汲んで来て。」

本を読みながら登ってきたばかりの青年にすぐさま、次の用事を口にする。

青年は縄で樽と体を縛ると下山していく。

そして、再び頂上へ。

「よく、三ヶ月耐えたな。感心感心。」

満面の笑みでツヴァイの肩を叩くバーン。

「次は？」

紙と鉛筆をもったバーンは何かを書き始めた。

「今日からは今までのトレーニング＋勉強だ。」

嫌そうな顔でツヴァイは岩を担ぐ。

その重さは先ほどの木や水以上。

バーンは書いた紙を見せながら説明をしていく。

「では属性から説明する。」

まず、基本の4大属性と言われるのが 火・風・水・地。

相性が悪いのは 火と水 風と地。

相性が良いのは 火と地 風と水。

そして、それぞれの属性の特徴だが・・・紙を見てくれ。」

火・・・近距離パワー型

水・・・中距離バランス型

地・・・中距離ガード型
風・・・遠距離スピード型

「俺は地属性だから・・・中距離ガード型？」

「そういうことになるな。」

「中距離って？」

「相手に対する攻撃や防御の際の適度な距離のことだ。」

ガード型とは、そのままの意味で地属性の者は守りが一番強いのだ。」

「攻撃は？」

「力と言えば火属性の能力者のほうが方がいい。」

この割合はLvで説明しよう。」

火・・・力（近）Lv10	守りLv8	素早さLv6	力（遠）Lv4
地・・・力（近）Lv8	守りLv10	素早さLv4	力（遠）Lv6
風・・・力（近）Lv4	守りLv6	素早さLv8	力（遠）Lv10
水・・・力（近）Lv7	守りLv7	素早さLv7	力（遠）Lv7

「水属性は均等っすね。」

「攻め、守りの両方がバランスよく、すべてにおいて応用が利きやすい

唯一の属性だからな。どれかが飛びぬけてないというデメリットもあるが。」

まあ、これは全て仮設定であって、数字はいくらでも変動すると考えておけ。」

水属性でいえば、オール4の人でもいればオール8の人がいるかもしれない。

本人のポテンシャルもあるが大部分は努力だろうな。」

「あれ？自分の属性以外は使えるんすか？」

「いいところに気づいたな。」

たしかに得意属性以外も使うことが可能だ。

割合は%で説明しよう。」

「なんで？」

「作者に聞けよ。説明するぞ。」

火属性者・・・	火	100%	地	80%	水	0%	風	60%
地属性者・・・	火	80%	地	100%	水	60%	風	0%
水属性者・・・	火	0%	地	60%	水	100%	風	80%
風属性者・・・	火	60%	地	0%	水	80%	風	100%

「地属性の俺は風の精霊の力は使えないんすか？」

「うん。これは絶対無理。でも、例外がある。」

「？」

「光・闇の属性だ。」

すべての属性の光の部分、闇の部分を扱うことができるといわれている。」

「いわれている？？たしかな情報なんすか？」

「いや、この手の属性者がほとんどいないために全然詳しく調べられてないんだ。」

故にレアな属性者だな。とくに光属性は。」

「闇は？」

「のびたの暗黒王・こすずめの闇属性でかつて痛い目にあつた経験がある。」

しかも王直轄部隊の獣神の称号をもつ7人もバリバリの闇属性。わしは未だかつて光属性者は見たことも聞いたことも無い。

そういえば、あまり知られていない属性で 氷・雷 の二つがあったな。

「それも・・・よくわかってないとか？」

「正解。だって、属性者が少ないんだ！！」

しかし、四大属性に含まれていないということはこの属性は独立したタイプと

考えられている。有力な情報としては、水と地の間で氷属性。火と風の間で雷属性だ。

まあ、頭の隅にでも置いといてくれ。そして、次が武器や防具についてだ。

武器や防具にも属性がついており、所持者の力を増やしてくれる役割を果たして

くれるものもある。代表的なものは、各国の王が扱う神刀だな。属性のことを考えず自分の属性と反対の属性のついた武器をもつと武器の威力も半減

して、所持者自身も力が下がることもあるから注意するように。

ちなみに武器は使えば使うほど威力がレベルUPしていくから訓練は欠かさずするべきだ。

鍛冶で作られた武器などを装備すると特殊な力などがついていてすぐにパワーアップできる。

また、自分の力で作り出した武器などは自分で特殊な力を作り出すことができる。

これらにも弱点があり・・・。」

「道具などに力が備わっているとすぐに力がUPするけど、壊れたりしたら

かなりのパワーダウン。道具自体を作りだすと壊れても何度でも

作り出せて

便利だが体力や精神力の消耗が激しいとか？」

「うむ。大体、正解。

残りの大きなデメリットとして取り上げられるのは、その力を扱うときの条件だ。

たいていは体力や精神力ですむが能力を使う変わりに何か別の物を消耗したり

時には所持者自身の血や体の一部または・・・命。」

「死か。」

「そのかわりに爆発的な力を手に入れることができるから、無属性のものでも

精霊の力と互角かそれ以上に戦うことができる。

次に無属性者と有属性者との大きな違いだ。

無属性者は精霊の力が使えないため己の体の力しか使うことしかできない。

有属性者は精霊の力が己の力とプラスされるのでかなり有利になる。

先の説明を過去の話で例えると・・・。」

「・・・・。」

「まあ、聞け。

双剣２話で無属性者・ストーンと有属性者・白い旋風の戦闘があるのだが

武器での押し合いの結果、白い旋風が押し勝った。

素の力だけでいえばストーンのほうが上の戦いだが、白い旋風が勝った理由。

それは、紛れも無く精霊の力によるものだ。これを簡単に数値化すると・・・・。」

ストーン (自己の力) 100 + (精霊の力) 0 = 10

0
白い旋風 (自己の力) 60 + (精霊の力) 80 = 140

「このような計算になる。」

結果、ストーンは100 - 140で40も力で負けてしまっているのだ。

自己の力にプラスされる精霊の力が無属性者と有属性者との大きな違いなのだ。」

「基本的な身体能力にこれほどの開きがでるのか。」

「よって、精霊の力には精霊の力に対応するしかないということになる。」

「なるほど。」

「そうとわかれば!!」

バーンは自分が座っていた岩をツヴァイの担いでいる岩の上に乱暴に投げ置く。

「今は基礎体力をUPさせて、いろんなことができるように器を広げる時期だ。」

目先の力に振り回されず、ゆっくりと自分に合った力を考えればいい。」

そういうとバーンは椅子に座って目を閉じた。

倍の重さになってツヴァイの顔は赤くなっていき、苦しい表情になる。

(い、いつまで……。)

「日が暮れるまで。」

やがて、イビキが聞こえてきた。

第9話

「なんだ？」

異常なまでに膨れ上がったグラムの力の変化に冷静さを保つことができない。

人間とは思えない声で叫ぶその姿に理性の欠片を感じさせなかった。

飛び掛りざまに振り下ろした一撃は容易く地面を深くえぐり取り。

大木を次々となぎ倒していく。

圧倒的な力の前にらあくは唾を飲み込む。

（これは・・・呪物の力によるものだな。しかも、かなり達の悪い。）

森の木がかなり倒され太陽の光が霧と暗闇を取り去っていった。

そこから見えたグラムの姿はダメージを受けなくとも、無数の傷が刻まれている。

（人間の体のまま精霊の力を無理やり取り込んで攻撃するのだから体が絶えられるわけがないのだが・・・というか、普通やるか？）

さらに急加速していく攻撃はらあくでも手に負えぬ状況に発展していく。

森の外からでもその激しい音は聞こえてくる。

鳴り止まぬ大砲のような音が森の中から、幾度も。

「何がおきてるんだ？ 答えろ！！」

モトはストーンの首元を掴んだ。

「グラム殿は、呪物の力により通常時の何十倍もの力を得ているのです。」

「呪物だと？」

「今、グラム殿は命の危険を伴い、その力を得ています。」

「何！？」

「人間の肉体では背負いきれないほどの力で相手を圧倒しているでしょう。」

しかし、そんな攻撃を続けていれば自分の肉は切れ、骨は砕け、最後には……。」

居ても立つてもいられなくなったモトは森の中へ入ろうとするが止められる。

「はなせ！―許さんぞ。そんな勝手なこと！―！」

「覚悟を決めたのはグラム殿です！―軍師は軍師の務めを果たしてください。」

体は小刻みに震える。

「なんで……そんな勝手なこと。」

「今のうちに周りに指示を。」

冷静に話しているが彼の目は赤く充血している。

（一度、敗北をした相手には二度と負けない……それがグラム殿がきめた制約。

我らが精霊の力と対抗するには、このような手段しか。）

モトが合図を送ると全員がマールルに向かって後退していった。

森の中ではいまだ、けたたましい音が鳴り響いている。

振りかぶったグラムの一撃にカウンターを合わせて剣を振り下ろすが

らあくの剣は触れずとも簡単に折れてしまった。

「ふむ。並みの剣では話にならんか。」

鉄棍に纏われた異様な精霊の力が触れずともらあくの剣をへし折る。

（素質だけでもかなりのものだけあって、精霊の力があると將軍クラスでも

手を焼く実力だな。）

らあくはおもしろそうに笑うとタバコを口にくわえる。

「何年ぶりかな？姿を変えるのは。」

本能が彼の足を止めた。

らあくの体は黒い塊に覆われ、その黒い塊は大きく膨らんでいった。マールルに向かう最後の一本道の最後尾でモトとストーンが敵を攻撃して引きつけていた。

何か異変に気づいたストーンはその場に立ち止まる。

「どうした？」

「・・・はやく、みなとN將軍のところに。」

次の言葉を口にしようとするところだった。

大きな黒い塊が後ろからすごい勢いで迫ってくる。

「ストーン！！はやく・・・！！？」

ストーンを見ると肌の部分は赤くかわり、血管が太く浮かび出ている。

目は獣のように鋭く、異様な雰囲気撒き散らす。

「はやく・・・いけ。」

その言葉を最後にストーンは吼え始めた。

そして、モトの目から大剣が一瞬にして消えた瞬間だった。

響き渡る金属音が聞こえたと同時にモトの目の前に大きな黒い塊が突如、急停止する。

牙が届く手前で大剣と鉄棍が止めたのだ。

「先程の女か・・・しかも、この大剣の男もこいつと同じく呪物を。」

「！？」

「姿を変えたから覚えてないのも仕方ないか。」

先程、お前の剣を口でくわえた男といえ、わかるかな？」

「そ、その姿・・・。」

モトが見ているらあくの姿は黒くて、大きな狼だ。

鋼をも簡単に噛み砕いてしまいうような牙、燃えるような赤い目。

爪は牙より巨大で、二尾あるしっぱは黒い炎で包まれている。

「何をしている。早く走れ。」

真紅の顔をしているグラムがモトに話しかけると、ストーンと同時

に得物を振り切り

らあくを無理矢理後退させた。

「絶対、戻ってくるから！！だから・・・死ぬな！！。」

モトがいなくなり、グラムはため息をついた。

「死ぬなつつたつてなあ。お前、説明しちやったのか？」

「虚実をとりまぜて。」

「どのあたりを？」

「命の危険を伴うと・・・。」

「おい。それ違うだろう。命の危険じゃなくて、命を捧げたんだぜ。」

「そんな馬鹿が二人もいるとは思わなかったぞ。」

らあくが二人の会話に割り込んだ。

「犬に言われたくないぜ。」

「あまり、長く疑獣できないからおしゃべりはこのくらいだ。」

「サクつといきますか。」

らあくの目の前にいる二人の体から湯気が出始める。

グラムの周囲の土が轟音とともに巻き上がる。

視界を遮られたがらあくは炎を360度にはき続ける。

しかし、炎を無視するように飛び込み鉄棍で前足を薙ぎ払われると土が落ちてくる空中からストーンごと落下してきた。

逃げ遅れたらあくの背中に大剣を突き立てられるが、金属音が聞こえるとはじき返された。

「私の毛は鋼以上の硬度を誇っているぞ。」

らあくが地に足を潜らせると毛が逆立ち始めた。

「だから？」

双方による休まない乱れうちが激しくらあくの体を襲う。

（私の最大防御にここまでダメージを蓄積させるとは・・・。）

硬質化した毛の先端が少しずつだが欠片に変わっていく。

「自慢の毛がなくなるのも時間の問題ですな。」

らあくの口元がニヤリと上がると、毛が先ほどより伸びだした。

（無駄撃ちか・・・。）

無造作に振ったらあくの爪が大剣にあたり

そのたった一撃が強化された大剣にひびを与えた。

それからの3者の動きは大地揺らし、風が巻き上がるほど激しいものとなった。

一方、マーラルに敵とともに到着したモトたちは乱戦を予想していたのだが

すでに戦いは終わったかのような不気味で静かな戦場にいた。

兵士たちはなにもしゃべることができずその風景に目を奪われている。

無論、敵軍も。

「何が起きたのだ？」

モトがつぶやくと敵兵の1人が叫び始めた。

見ると敵兵は足元から透明なものに包まれ身動きが取れなくなりやがて全身をそれが包み込んだ。

そして周りの敵兵も全員、先程の兵のように固まってしまった。

「いやゝモト軍師。時間がかかって申し訳なかった。

もう少し早く援護に向かうはずだったのだが、さすがのびた兵力。私の能力をもつてしても時間が大いにかかってしまつて。」

N^3の右手には刀身のない柄だけがある。

「やれやれ。クリスタルがほとんどなくなってしまった。」

悲しそうに柄を覗き込むN^3にモトの疑問は高まるが、今はそれどころではなかった。

「將軍！！グラムたちが大変なのです。早く！！」

腕をひっぱると馬に跨り来た道をN^3と共に戻っていった。

残されたモトの部隊は状況がわからずその場に立ち尽くしていた。

「おい。お前たちも手伝ってくれ。」

城の正面のほうから馬に跨った兵士がやってくる。

言われるがままに先ほどまでN^3の部隊が戦っていた戦場に向かう。

そして、その光景に全員が尻餅をついた。

「こいつらをサッサとのびたの領土近くに送り返さねばなんのだ。早くしろよ。」

マーラルの大地に何千ものクリスタルの造形が存在していた。

第10話

第十話

デネブにいるポトフ国王こと白い旋風。
復国したばかりのこの国には問題が数多い。

今日も彼の机には書類が山積みであり、彼はそれに目を配っているところだ。

「心配か？」

不意をつく一言に片目をつり上げた。

「心配？それはありません。」

「なぜだ？」

「理由はないですけど・・・ただ。」

問いかけたニセ禅師が今度は片目をつり上げる。

「やられるために復国したわけじゃないですから。」

口に手を当てながらニセ禅師は笑いが止まらない。

「まっただな。」

窓から二人は戦の方向に目を向けた。

すると城にいながら地響きが。

窓を見ると彗星の如き光が戦場に向かって飛んでいった。

「あれは・・・なんだ？」

そこへ沙羅が血相を変えてやってきた。

「こ、国王！！国宝が飛んでいきました！！」

国宝とは文字どおりそれぞれの国にある宝であり象徴である。

何百年も前に国ができた同時に神より授かったのが国宝と呼ばれており

どの国も城の最下層に封印してあるものだったのだ。
それが今しがた封印を自ら破り飛んでいったと言うのだ。

「何百年も封印されていた代物が一体何を？」

夜空に描かれた光の線が朧になっていた。

「大きな獣に変わった人間？そんなことができるのはこすずめ直属の直轄部隊、闇獣の称号をもらった一人だろう。」

モトの説明を聞いてN^3は答える。

「闇獣？」

「なんでも特殊な精霊を使うやつらで、強さもこすずめが認めたほどの者たちのことをのびたではそう呼んでるのだ。しかし、人が化け物に変われるとは・・・末恐ろしい。」

「私を含め、グラムとストーン三人でもまったくかいませんでした。」

「そりゃそうさ。なんせその闇獣たちは一国の王レベルの力を持つものたち。ニセ禅師と戦うといっても過言じゃないよ。」

激闘の場へ馬をすすめるモトは二人の安否に不安で頭がどうにかなりそうだった。

近づくたびに空から降ってくる岩や木が増えてくる。

「こ、こりゃすごい。呪物の力で得たにはあまりにも強力だ。」

馬から飛び降りたN^3は落ちてくるものを避けながらその場に近づいていく。

「ストーン、グラム!!」

モトも転がり落ちるようにその場にいき叫んだ。

目の前には人間の動きを超越した三者の戦いが繰り広げられていた。

第11話

第十一話

黒い影がすれ違ったびに火花が散り、鮮血が飛び交う。

モトの真上を飛んでいったのはグラム。

明後日の方向に折れ曲がった左腕を構う事無く立ち上がりモトを掠めるように走り抜ける。

「將軍！！」

困った顔でN^3は答える。

「私の能力は対無属性者用だから有属性者であるあちらさんには効果はないんだ。」

「ならばグラムとストーンを。」

「可能だが・・・今、ヤツと互角に戦えるのはあの二人だけだぞ。君と私では手に余る相手だ。」

「いいえ。私一人で。」

「んなあ無茶な・・・。」

N^3は横を見ると彼女の目は本気になっている。

「それでいいんだな？」

「お願いします。」

蛇剣を抜刀して気合をいれるモト。

刃のない剣の柄を向けると血だらけのストーンとグラムがクリスタルに包まれ動きが止まった。

疑問を感じながら、らあくは視線をN^3に向ける。

「くだらんことを。」

怒りで力任せにN^3に向かい走っていくらあくの道を大地が裂けて阻んだ。

視線を向けるが一本の蛇剣が刺さっている場所にモトはいない。

「どこにしようが構わん・・・焼き尽くしてやる。」

黒い炎がらくの全身を包み、周りに勢いよく炎を飛ばす。

クリスタルで固めたストーン・グラム像の後ろへN^3は転げよる。

「めちゃくちゃすぎる！！なんとかせんとこっちが死んでしまう。」

柄に持っていた小さなクリスタルを差し込むと自身の精霊の力を練りこむ。

グラムたちの像の前に聳え立った大きなクリスタルの壁はらくの炎を完全に防ぎ

その間にロープで二体の像を結びN^3は馬のところまで引つ張っていく。

炎を放つのをやめてみれば、その場にあつた木や岩などの地以外ものはなくなり

らくを中心にな地ができたようになってる。

黒い瞳がギョロリと辺りを見渡す。

そのとき、右手から滲み出る自分の血に気づき飛び引いた。

地中から這い出てきたモトは血の付いた剣刺を再び大地に突き刺し残った剣刺・蛇剣を抜刀してらくへ構える。

下手に持った双方を矢継ぎ早に大地に突き刺しまくると、地から突起物が突き出しながらくにせまるが

退く様子もなく正面からぶち壊しながら突き進んでくる。

蛇剣をらくに向け投げ飛ばすがヒョウとよけられてしまい地に刺さる。

柳葉刀を抜刀し構えるがらくに突き飛ばされ、高々と体が宙に舞い上がる。

地面に落ちると喀血して呼吸がしくくなり足がおぼつかないが目だけはらくをしつかりと視野にいられている。

「勝てないことは前の戦いでわかってるだろう。さっさと街を捨てて逃げないのか？」

深く息を吸い込むと口の中の血を吐き出して迫るモトは問いには答

えない。

炎を吐き出せばモトを包みこむが剣刺の水の属性が所持者に火に対し抵抗力を与えている。

しかし、皮膚や髪の毛が焦げていきマントに火がうつり再び弾き飛ばされ地面に叩きつけられるが剣刺をその場に突き立てた。

「なら、早く殺せよ。イヌ。」

顔にこそ出していないが体全体を取り巻く黒い炎が勢いを増したのと言つまでもない。

一瞬にしてモトの右・前腕、上腕を一噛みにした。

噛み付かれたままで引きずられているモトは残った三肢であくにしがみついている。

そして、大きく息を吸い込んでから口の中にたまっている血を目に向けて吐きかけた。

視界が真っ赤なカーテンに遮られたらあくは速度を少し落としてしまふ。

そこであくの前足に片足を突っ込むと踏み碎いたと同時にその場に転んでしまふ。

涙で血を洗い出しているらあくの耳元にまだ暖かい血を流すモトがそつと呟いた。

「腕でも足でもなんでもくれてやるよ……そのかわり……」

ゴクリと唾を飲む音が大きくなる。

「お前の“命”をくれ。」

地面にそつと左手をつけると各場所に取り囲むように突き刺した剣が光り始める。

「何をした？」

「大地の蛇剣と水の剣刺との精霊の力で地中深くに一緒に沈んで窒息死。」

「それは残念だ。」

意味深な言葉を残したまま一人は地に吸い込まれていくように沈んでいった。

第12話

第十二話

爆発音とともに大地が揺れる。

二体の像を引きずりながら馬を走らせていたN^3が後ろを振り返った。

「モト……。お前との約束は守ろう。」

手綱を握る手には力が入る。

再び走り出すN^3の前方にはどうしたことが巨大な光が迫ってきた。

その光は一直線でN^3を避けることなく体をすり抜けた。

すり抜けた後、息をすることを忘れていたのか口から息がこぼれ額から流れた冷や汗を拭くと、再度手綱を引き

「なんだかなあ。」と馬を走らせた。

地中から起きた爆発のせいもありポツカリと一つの穴があいている。

土を被ったままらあくが元の姿でゆっくりとでてくる。

肩にはぐったりしたモトが。

「時間切れになると獣化が解けて爆発する仕組みにしてたんだが・・
・本当に残念だ。」

投げ下ろすとモトの柳葉刀を拾い上げモトに振り下ろした。

ところが振り下ろした刀身を驚掴みにモトが静止させてしまったのだ。

引くにも押すにも微動だにしない力の強さにらあくの背中に冷たい汗が噴出す。

（こ、こいつ……一体どこにこんな力を残してたんだ？）

全身、血や土で紅黒くなり右足は砕けて正常とは程遠い形で刀身を掴んでいる右腕に関しては未だ出血がとどまることがない。

それらに目を奪われているうちにモトの左腕の肘までがすっぽりと地中に埋まっていた。

口を開こうとするとドンッと腹部を何かが叩き、足が宙に浮いた。踏ん張りのきかない足とくの字に折れた上半身が衝撃の強さを物語る。

地中からでてきた突起物はモトの左腕のあたりから盛り上がっている。

（今までの力とは別物だ・・・いや、別人というべきか？）

地中から出てきた左腕には今までにはなかった黄金の籠手が生き物のようにモトについている。

奇妙な音をたてながら折れた足は復元され、口や腕からでていた夥しい出血も完全に治癒されたように見える。

（なんて高純度な精霊の力だ・・・オーラが溢れている。）

見間違えるほどの力に空間が歪んだようにならあくには見えてしまう。

だが、一番驚いているのは本人だった。

止めようのない巨大な力が左腕から全身へめぐってくる感覚は、モトを不思議な陶酔感に引き込んでいく。

先ほど指一本動かすことすらできなかった体が今では大地を揺らさるばかりの力を蓄えている。

（あゝ軽。あんなに巨大に見えたあいつが小さく見える。）

「どうした？来ないのか？」

らあくの言葉にキョトンと目を見開くとすまなさそうにモトは頭を傾ける。

「悪い。すぐにいく。」

右拳を抱え込むよう構えると一足であくの制空圏へ飛び込んだ。折れた剣を捨てたらあくは牽制の左をコンパクトに突き出した。

はじかれたと同時に右手首には掴まれた感触が、と思った時には地面に叩きつけられている。

素早く立ち上がるうと両手を地面にあてるが右へバランスを崩して立つことができない。

外されたリストを見てギョっとする顎を蹴り上げられ全身が宙に泳ぐ。

断定できないほどの打撃音が体幹へリズムよく叩き込まれた。

背中を向けるほどの遠心力がかかった蹴りに即座にタイミングを合わせたらあくは左手一本で足をいなす。

（逆技？）

空中で回転しながら地面に落ちるはずなのだが籠手のがびて地に突き刺さり、逆さまのまま静止した。

「あいか？」

ため息交じりに発せられた言葉にモトは全力で答えた。

「ありさ。」

側頭部を捕らえた蹴りはあくを左側へ二転、三転と吹っ飛ばした。

距離がとれた時間で手首を入れ治すとすぐに立ち上がった。

（上段なのにもう立ち上がってる・・・。）

そこへすでに潜り込んでいるモトの両拳が唸り上げる。

避けるらくも先ほどまでの剣技とは完成純度の違うモトの格技にやっとな理解する。

「（こつちが本業か。）悪いが、貴様の土俵にはつきあえん。」

二人の間に黒い炎が割って入り、距離を置かせた。

炎の向こうであくがしゃがむのが見える。

両手を地面に合わせ、土がモトの周りを固め始めたが炎の壁は爆発して辺りに炎を撒き散らせた。

衝撃音がドンドンと鳴り続けていたがやがてなくなった。

モトは土の壁をやぶり外を凝視する。

（いない？）

辺りは焦げ臭く、戦闘の激しさで地形が変わっている。

籠手は静かに左腕から落ちた。

第13話

第十三話

先の戦でおきた国宝が動き出したという珍事はまたたくまに世界に知れ渡り、モトの名を世界に知らしめた。

なにせ、現国王の中でも扱えたものはおらず。

なにより、過去に国宝を使用できた人物ですら一人として確認されていないのだ。

いつしかモトは双剣と国宝を扱うため

「双剣神」という名で自国のみならず他国からも一目置かれる身になった。

これほどの名誉の中、モトは先の戦をニセ禅師にこう話している。

「あの戦で戦闘したらあくという騎士は、次に対峙した時、今の私が国宝を使おうと勝てる見込みはありません。」

異常な言葉にニセ禅師は表情ひとつ変えずに疑問を投げかけた。

「なぜ、そう思う？」

「彼はロードオブヴァーミリオンを所持しておりませんでした。」

ロードオブヴァーミリオン

のびた国に伝わる最強の武器の一つ

そのロードオブヴァーミリオンを所有するものに与えられるのびた国の称号こそ、闇獣^{えんじゅう}。

ロードオブヴァーミリオンは誰かがつくった武器ではない。

闇属性のものが

「最も愛する人」を手にかけた武器こそがロードオブヴァーミリオンとして姿を変える。

愛が深ければ深いほど、愛する人が多ければ多いほど、その色はより漆黒に近づいていく。

愛するという感情を貪りながらロードオブヴァーミリオンはその強さを巨大化させていく。

「そうか・・・もういい、下がれ。」

そういわれるとモトは静かに部屋をでていった。

（もしかしたらと思ってたんだが・・・やはり、国宝を扱えるモトでも勝てないと言わせるか。）

椅子に寄りかかりながらため息をついたニセ禅師は天井を見つめてあることに気がついた。

「あいつ、『今の私が』って言ったな・・・。」

彼の口元が自然に緩んだ

モトは城から離れた建物に来ていた。

その中にはN^3もいる。

二人の目の前にある大きなクリスタルの中には見慣れた二人の人間が・・・。

双方とも片腕が根元までなくなり、ほかの部位にいたっても生きているのが不思議なくらいの形をしていた。

「傷が癒えるまで・・・とは言っても、この体の中身はからっぽだ。」

「命を糧に力を・・・。」

「だが、二人ともすべてを出したわけではない。その証拠に体は完全に呪物に飲み込まれていない。」

「なら、何か別のもので補えば。」

「かわりがあるかどうか。」

言葉のあとにN^3は建物を出て行った。

「見つけてみせる・・・なんであろうと。」

その場を去る黒い瞳に迷いは無い。

第14話

第十四話

戦場から戦場へ

休息も無く平和を求めるわけでもなく恨みで動くわけでもなくただただ、強さのみを求めて今日も男は戦場を駆ける。振りかざす槍で何百の命をかりとりながら・・・戦場へ。

その行為はやがて強者に出会う。

そして、紅月は出会った。

とてつもなく大きな力をもつ、雷将・レーネに。

世界で唯一、雷の精霊をもつゼノビア国所属の女性で長くからゼノビア王家に仕える名家の一人娘だった。

その比類なき強さは現国王であるR2をも凌ぐと周りに言わしめた程である。

すべてを兼ね揃えているその人物と出会ったのはやはり戦場だった。

ゼノビア軍に雇われた傭兵として参加した戦場でレーネの戦いを見た紅月は目を奪われる。

そして、彼は笑った。

超えるべきハードルを見つけたとき彼は子供のように無邪気に笑った。

自軍からの攻撃。

否、強者を求めた男からの挑戦にレーネも笑った。

対峙した瞬間に男が越えてきた死線の数、殺してきた人間の数が同輩にも先達にも並ぶものがないことを悟った。

“殺せ、殺せ！！”

内側からの殺意が自分を塗りつぶしていくのがわかる。

そして、飛び掛ると同時に意識は途切れた。

「気がついたか？」

知らない声が聞こえる。

瞳を開けば白い天井が。

「ここは？」

「私の家だ。しかし、君の行動には驚いたよ。」

「何？」

自分が寝ているベットの隣に座っている女性に目を向ける。

「私に飛び掛ってきたんだぞ。」

笑いながら話すことではないはずなのに彼女は笑っている。

そんなレーネを紅月は可憐に思った。

しばしの沈黙の後、紅月は我に変える。

「お、お前がああの時の？」

姿が華奢に見えたが女だとは思ってなかった紅月は困惑する。

「そうだが……。私を男だとおもったのか？」

返答に困る紅月に再び、彼女は笑いだす。

「なにも知らないで私に飛び掛ったのか。本当におもしろいやつだな。」

しばし笑い続けた後、レーネは紅月に近づいた。

「私についてこい。君となら楽しそうだ。」

さらなる高みへの一歩。

「お前を殺そうとしたヤツなのにか？」

「だからこそさ。なんならいつでもかかってくれればいい……。どうだ？」

もはや答えるまでもなかった。

第15話

第十五話

「とりあえず、私とともに行動をするにはそれなりのことをしなければならぬ。」

「それなりのこと？」

ニタニタと笑いながらレーネは何かを思いつく。

「紅月、君は頭脳明晰か？」

紅月は頭を横に振る。

「なら、鉄があれば剣や盾を作れるか？」

再び横へ振る。

「ほかには料理がうまいとか商売上手とか……。」

「さつきから何が言いたいんだ？」

「つまり、君の特技らしい特技は戦いだよな？」

「……まあ、そういうことになるな。」

「よし。面倒は抜きにして手っ取り早いこつ。」

そういつて彼女は部屋を出て行った。

「その手っ取り早いやり方ってやつがこれか……。」

二日後、闘技場に呼ばれた紅月の前には現国王・R2とレーネ、そしてもう一人。

「貴様が紅月か。」

レーネの隣にいるR2が口を開くと空間が歪んで見え、思わず足が後退してしまうほどの存在感に手に汗を握る。

「レーネのいる部隊は俺の直屬部隊だ。弱いヤツはいらん。強さをみせろ。」

ストレートな物言いにポカーンとしている紅月を尻目にR2は観客

席に歩いていった。

「君、殺されるなよ。」

笑顔でいいながらR2の後をレーネはついて行く。
視野がレーネにいった時だった。

バサッと地面に何かが落ちる音がした。

目の前にいたローブを被っていた人物がいない。

否、地面をすれすれで駆け出し紅月の間合いに侵入している。

細身の剣を心臓目掛けて突きだされ浮き足立つところだが、紅月は違った。

いとも容易く槍で叩き折ったのだ。

R2のとなりでレーネはガッツポーズをきめる。

間髪いれず、横から振り出した槍が空を切った。

「武器がなくなっただぜ。」

台詞をきめたと同時に相手の顔を見て、紅月はギョとする。

「どうした？女が珍しいか？」

距離をとっている女は両手をダラリと完全に脱力した状態で紅月を見ている。

紅月は少し鼻を噉ると槍を掲げたままゆっくりと歩み寄る。

「ほお。真珠に能力を使わせるか。」

「私だつて使わされましたからね。」

R2は意外という顔でレーネをみる。

「あいつは？」

真顔のR2を尻目にレーネは急に笑い始めた。

「素人・・・つか、精霊の力の存在すら知りません。」

「じゃあ、なぜあんな量のオーラがでてるんだ？」

対峙している真珠の目の前の男からはR2と同等、もしくはそれ以上の精霊の力が溢れ出ている。

（どういう男だ???)

表情を崩すことはないが莫大なエネルギーを前に真珠の四肢先端に力が入る。

「今まで指導者に出会わなかったことは紅月にとって幸運だったかも知れませんか。」

レーネは紅月から目を離すことはない。

その蒼い瞳はまっすぐと紅月を見ている。

そして、客席から身を乗り出し……。

「いけー!!!」

笑いながら発せられた言葉と同時に紅月は地を勢いよく蹴った。

大きく振りかぶったその一撃は闘技場全体を揺らし、地面を粉々にして宙に舞い上げた。

「げ、国費が……。」

ちなみにゼノビアは財政難の真っ只中。

視界が閉ざされた真珠の真後ろを取った紅月は槍を投げつけるが不思議なことが起こった。

真珠はまるでそこに槍がくることがわかっていたかのようにわざとゆっくり横をあるいて避けた。

しかも目をつぶったまま。

再び、駆け出した紅月は左拳を下腹部に標準をあわせて放った。

にゅっと伸びた足が紅月の上腕を押さえつけてそれ以上の動作を許さない。

右手で払いのけると下段の回し蹴りを……。

しかし、先ほどと同じく伸びた足が紅月の大腿を押さえつける。

その足に目が言った瞬間、頬に冷たい手が触れた。

油断……否、そんなものではない。

パンツとないはずの水の塊が勢いよく爆ぜた。

反射で閉じられた瞳はコンマ一秒、光を失い暗闇の世界へ。

その暗闇に入った瞬間に後頭部へ振動が……。

そして衝撃は連動して上肢を下がらせ、膝を揺らした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1104d/>

『Dual Swords ～双剣～』

2010年12月5日06時05分発行